2018年度　　EB JB BBC CA WA

国　　語

注　意

1. 問題は全部で17ページである。
2. 解答用紙に氏名を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが，どのページも切り離してはいけない。
5. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

マーク・シート記入上の注意

1. ＨＢの黒鉛筆またはシャープペンシルを用いて記入すること。
2. 解答用紙にあらかじめプリントされた受験番号を確認すること。
3. 解答する番号の ◯ を塗りつぶしなさい。◯で囲んだり╳をつけたりしてはいけない。

解答記入例（解答が 1 のとき）

1	● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⓪

4. 一度記入したマークを消す場合は，消しゴムでよく消すこと。╳をつけても消したことにならない。
5. 解答用紙をよごしたり，折り曲げたりしないこと。

一　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

慣習が支配する「荒涼たる単調な長い時代」は、人類にとって決して失われた時代ではありませんでした。秩序の端緒を開き、国家の基礎をすえるにはそれが必要だったのです。しかし、かつて世界を改良するためにもちこまれた慣習のくびきは、人類の進歩をさまたげるにいたります。「慣習の支配」によって人類の自由は拘束され、独創性は停滞します。そのような世界を終わらせ、人類を「慣習の支配」から解放することが「近代」の歴史的意味でした。*バジョットはそれを「議論による統治」の確立という命題に集約したのです。

バジョットによれば、ある主題を議論に委ねる目的をもって議論に付することは、それだけでその主題は決して既成の規範によっては解決されないということを容認することです。そのことは社会集団が従うべき神聖な権威の不在を容認することを意味します。単一または複数の主題が一旦議論に付されるならば、まもなく議論は習慣化され、既成の慣習の[1]神聖な呪力は解体されるにいたるのです。

バジョットは目的―手段の連鎖が複雑化した近代社会において正しく行動するためには、多くの時間を要すると考えます。「私がいわんとしたのは、多くの時間を『[2]日の当たる場所で寝そべること』、長い期間にわたる『単なる受動性』である」と述べています。バジョットは、物理学をはじめとする近代自然科学の台頭が、「同時代人が夢想者と考えた人々、同時代人の関心を引かないことに注目していたために嘲笑された人々、諺にいう『星を見ながら井戸に落ちた人々』、無用だと信じられた人々がもたらしたものである」と指摘します。そしてそのような創造的な「受動性」を、「単なる行動愛」の表われである過剰活動や即時行動と対比し、「議論による統治」の形成に重要な役割を果たすものと考えるのです。なぜならば、それは性急な行動を妨げ、入念な考慮を行うという「議論による統治」の目的に奉仕するからです。

しかもそれは「議論による統治」の下での議論の蓄積によって[3]ジョウセイされるのです。バジョットは「単純な時代」であった「前近代」に代わる「複雑な時代」の「近代」にとっては、英国史上でいえば*クロムウェルのような絶対的なリーダーの即断による迅

速な行動ではなく、結論を導き出すための長時間にわたる議論を許容する多数で多様な人々の「受動性」をより重要なものと考えています。バジョットにとって、「議論による統治」が複雑系としての「近代」に最も適合する政治形態である所以[4]はここにあるのです。

「議論による統治」に対しては、同時代の英国人の中に辛辣（しんらつ）な批判がありました。これら批判者たちは、「議論による統治」が台頭する同時代を「委員会の時代」などと形容しました。彼らは「委員会」は何もしない、すべてはおしゃべりの中に蒸発する、というような毒舌によって「議論による統治」を嘲笑したのです。彼らの最大の敵はもちろん「議会政治」で、バジョットは歴史家カーライルがこれを「国民的おしゃべり」と名づけた例を挙げています。また、「会戦は『弁論部』が指揮することはできない」という同時代の著名な政治家・著述家マコーレーが［　A　］警句の適切さを認めます。「そして他の多くの種類の行動もまた、単独の絶対的な将軍を必要とする」とバジョットは述べるのです。

しかしバジョットによれば、「近代」はもはや「クロムウェルのような人物によって英国が再び統治されるような時代」ではなく、「熱烈にして絶対的な一人の人間が、他の複数の熱烈な人たちの欲することを行い、それを直ちに行いうる時代」でもありません。「今や委員会や議会だけでなく、誰もが迅速な決定力をもって行動することはないのだ」とバジョットは言います。しかもバジョットは、そのような時代の傾向が事実に根拠を持つ真実であることを希望します。「というのは、私にいわせれば、それは前近代の遺伝的な野蛮的衝動が朽ち果て、死滅しつつあることを証明しているからだ」。つまりバジョットによれば、「近代」のヒョウシキ[5]である「議論による統治」は、「前近代」を特徴づける衝動的な行動至上主義を克服した結果でもあるからなのです。それによって「近代」においては政治の形態が変容し、行動よりも思考（熟慮）が重要となり、その意味では、性急な［　B　］性よりも静謐（せいひつ）な［　C　］性がより多くの価値をもつようになるのです。近年しばしば唱えられるようになった「熟議デモクラシー」もまた、結局そこに由来すると思われます。

「慣習の支配」とその下で固定化された身分構造が打破されると、家族を基本要素とする身分から解放された個人の自由とそれにもとづく選択の領域が拡大します。「身分」の時代から「選択」の時代への変化です。バジョットがその歴史観の形成に大きな影

響を受けた同時代の歴史家ヘンリー・S・メインは、よく知られているように、この歴史的変化を「身分から契約への移行」と要約しました。

このように図式化された近代化は、それに伴って固定された「慣習の支配」によって抑えられてきた前近代の深層に伏在する情動を噴出させます。それは議論を許さず、ひたすら迅速な行動へと駆り立てる原始社会への突然の回帰です。バジョットはこれを「先祖帰り」と呼びました。バジョットの理解では、フランス大革命において発生した残酷と恐怖の場面は、人間性の隠され、抑えられていた側面を表出させたものであり、旧体制の抑圧が破局によって取り除かれ、突然に選択の自由が与えられた時、秩序と自由とのカンゲキ[6]を縫って浮上したものでした。しかしこのような「人類の過剰な情動の激発」は、単に「原始社会の野蛮な性格」の再現として説明することはできません。「フランス人やアイルランド人のような高度に発達した人種でさえも、窮地においてはほとんど安定的ではないように思われる。彼らも瞬間の激情や現下の観念の決定に従って、どこにでも運び去られるようだ」とバジョットは述べています。

「慣習の支配」から国民性が解放され、自由と選択の機会が増大していく状況の中で、それに適合した秩序を形成できる統治とはどういうものか。これがバジョットの問題でした。バジョットにとって「近代」の課題とは、自由と秩序との両立であり、バジョットの「近代」概念はその課題の解決を志向するものでした。そのような目的意識から、「近代」概念の中核に据えられたのが「議論による統治」だったわけです。それは「前近代」の中に胚胎し、発展しながら、「前近代」の支配原理であった「慣習の支配」に代わって、「近代」の支配原理として「前近代」から継承され、確立されるべきものでした。

バジョットによれば、「慣習の支配」が打破され、「身分」の時代から「選択」の時代への変化、すなわち近代化が最初に成し遂げられたのは、政治形態が大幅に、そして時とともに「議論による統治」に近づいていった国々です。「いかなる国家も議論による統治をもたなければ一流たりえない」というのがバジョットの確信でした。それは共通の行動や共通の利益についての共通の議論が変化と進歩の根源になっている国家でした。そして、そこでの議論の主題は具体的な政策論よりも、むしろ抽象的な原則論であるべきでした。「議論による統治」の力は、議論の対象の大きさ[7]によるからです。バジョットによれば、具体的な政策論は言

語の活性を増大させ、弁舌の才を強化し、聴者の信頼を呼び起こす態度や表情をつくる能力を発達させはするものの、それは[8]「思弁的知性を呼び起こすことなく、思弁的教説を論ずるにいたらしめず、古代の諸原則に疑問を提起するにもいたらしめない」。逆にいえば、「議論による統治」の下での自由な議論は単に政治的自由のみならず、知的自由や芸術的自由の拡大をもたらします。バジョットはエリザベス朝時代以後の英国史上の文芸、哲学、建築、物理学などの成果の中にも「議論の力」を読み取るべきだと主張します。「近代」における宗教の影響力もまた、議論の影響力と結びついているというのがバジョットの見解です。

このように、「議論による統治」は政治以外の諸領域にも波及する影響力を持ちますが、[9]それを担う人間の資質をバジョットは「活性化された穏健性」と名づけました。そしてその顕現を文学的天才の文章に見出しているのです。バジョットは、ホーマー（ホメロス）、シェークスピア、さらにウォルター・スコットを例に挙げて、彼らの文章に現われた「活性化された穏健性」について次のように書いています。

天才でもあり、偉人でもある人間の著作を他のものから区別するものは何かと尋ねられれば、同じことば、「活性化された穏健性」が使われるであろう。そのような著作は決して緩慢ではなく、決して過剰ではなく、決して誇張されてもいない。それらの著作は常に判断力に満ちあふれているが、しかしその判断力は鈍いものではない。それらは野性的な作者をつくり上げている活力をもっているが、それらの文章のあらゆる一行一行は正常にして穏健な作者のつくり出したものである。

そこにバジョットは「生命力と均斉、活性と適正との結合」を見出します。それが文芸の領域に現われた「議論による統治」を担う資質なのです。それはバジョットによれば、英国人一般が共有している資質であり、バジョットは「拍車と手綱との結びつき」を世界における英国の「成功」（英国の「近代化」）を説明する根拠としているのです。

（三谷太一郎『日本の近代とは何であったか』より）

（注）

＊バジョット…英国のジャーナリスト。一九世紀後半に活動し、『英国の国家構造』などの著書がある。

＊クロムウェル…英国の軍人、政治家。ピューリタン革命の指導者。一七世紀中頃、独裁政治を行なった。

問一　傍線部1「神聖な呪力は解体される」とはどういう意味か。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 1 。

① かつて効果を発揮してきた呪文がきかなくなってしまう。

② それまで自明とされてきた価値が揺らぎ、疑われるようになる。

③ 前近代の宗教の持っていた非科学性が暴露され、人々が信仰を失う。

④ 人間には誰にも問題を解決する力がないことがわかり、とほうにくれる。

⑤ みな同じように生きるべきだという画一的な考えが弱まり、個性が認められる。

問二　傍線部2「日の当たる場所で寝そべること」とはどういう意味か。これを二字熟語で表した場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 2 。

① 怠惰　② 慣習　③ 統治　④ 熟慮　⑤ 創造

問三　傍線部3「ジョウセイ」を漢字に直した場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 3 。

① 醸成　② 情勢　③ 上製　④ 浄生　⑤ 定正

問四　傍線部4「所以」の説明として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 4 。

① 「しょいん」と読み、由来や起源を意味する。
② 「そい」と読み、結果や結論を意味する。
③ 「とこい」と読み、機能や用法を意味する。
④ 「ところ」と読み、目的や目標を意味する。
⑤ 「ゆえん」と読み、理由や根源を意味する。

問五　空欄 A に入れる言葉として、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 5 。

① 打った　② 課した　③ 指した　④ 届けた　⑤ 吐いた

問六　傍線部5「ヒョウシキ」を漢字に直した場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 6 。

① 標識　② 評式　③ 表色　④ 平織　⑤ 拍子木

問七　空欄 B ・ C に入れる言葉の組み合わせとして、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 7 。

① B―衝動　C―永遠
② B―身分　C―選択
③ B―能動　C―受動
④ B―生命　C―死滅
⑤ B―熱烈　C―冷淡

問八　傍線部6「カンゲキ」を漢字に直した場合、最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 8 。

① 感激　② 観劇　③ 間隙　④ 閑撃　⑤ 歓逆

問九　傍線部7「議論の対象の大きさ」とあるが、大きな対象を持つ議論とはどういうものか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 9 。

① 視野を大きく広げることにより、現実に生じている多様な問題の関連を意識しつつ展開する議論。
② 掘り下げて思考することにより、深いところでさまざまな本質的問題につながり得る議論。
③ 問題の性質を具体的に調査することにより、その詳細な実態を徹底的に解明できるような議論。
④ ことの起こりを歴史的にさかのぼって検討することにより、古代以来の変化をよく考慮した議論。
⑤ 過剰な衝動の発動を抑えることにより、選択の自由を限りなく大きく保証することのできる議論。

問十　傍線部8「それ」とは何を指すか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 10 。

① 具体的な政策論
② 抽象的な原則論
③ 言語の活性
④ 弁舌の才
⑤ 聴者の信頼を呼び起こす態度や表情

問十一　傍線部9「それを担う人間の資質」とはどのようなものか。最適なものを次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 11 。

① 古代からつちかわれてきた豊かな人間性を失わず、近代に伝えることのできる、高度に発達した資質。

② 政治的理性だけではなく、文学や芸術にも感動するような人間的感性をも身につけている資質。

③ 積極的に前進する生命力と立ち止まって考える判断力を、バランス良く兼ね備えた資質。

④ 弁舌によって言語の活性を増大させると同時に、思弁的知性をもあわせ持った資質。

⑤ 常に積極的な行動によって慣習の支配から脱出することのできる、活動的な資質。

問十二　この文章の内容に合っているものを、次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 12 。

① 古代には、あらゆる問題が宗教の神聖な権威によって決められていた。それをくつがえして、人々が理性的な判断によって自ら積極的に行動し、ものごとを決めるようになったのが近代である。

② 議論によって社会を治めてゆく方法は、前近代には未だ存在しなかった。それを考えることによって、近代の新たな秩序を形成する方法を生み出した知識人の一人がバジョットである。

③ 「議論による統治」はよいものだが、迅速な決定力を欠く「おしゃべり」におちいってしまう危険も持っている。自由と選択の機会が増大した近代には、進むべき道を決断する力を持った指導者のリーダー・シップも必要である。

④ 近代とは、複雑な問題を議論によって解決するようになった時代である。その議論においては、多様な意見を持った人々が、たがいに相手の意見をよく聞き、静かにじっくりと考えることが必要である。

⑤ 前近代の感性は近代の人々にも継承されているので、それを隠し、抑えつけることは、かえって残酷と恐怖の場面を生み出す恐れがある。そうした事態を避けるためには、過去の歴史を静かにゆっくりとかえりみる時間が必要である。

二　次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

人類の社会特徴というのは、社会の基本単位として、どの文化でも家族を持っていることです。男も女も集団間を行き来します。[1]他の霊長類のように行ったきりではなく、出たり入ったりする。そして、結婚が家族を結びつけて、複数の家族を含んだ共同体、コミュニティというものを持っている。これが人間の社会の特徴です。

重要なのは、共同体、家族という異なる論理の組織が両立しているということです。集団の論理というのは、構成員が仲たがいしないようなルールを必要とします。サルは互いの優劣関係を認知して共存しているし、類人猿は互酬性を重んじて食物を分配したり、けんかが起これば第三者が[2]チュウサイに入ります。家族というのは、そういったものではなくて、見返りを求めず奉仕するという組織です。自分の血縁ですから、血縁のためには自分の犠牲を厭わないことがあります。

動物は、この二つを組み合わせることができません。どちらかしかない。ゴリラはどちらかというと家族的な集団を、チンパンジーは共同体的な集団をつくります。人間は、この二つを組み合わせて社会をつくった。ここに、食と性が逆転するという現象が必要になった理由が隠されていると思います。食物の分配を広範におこなって共同体内では互酬性をルール化し、家族内に性を閉じ込めて繁殖の平等を図ったのです。そして、これらを両立させるためには高い共感力と、罰を伴う規範が必要になった。

人間のもつ普遍的な社会性というのは三つあると思います。向社会性、互酬性、半永続的帰属性です。向社会性というのは、相手の身になって、相手のために何かしたいと思う気持ちです。互酬性というのは、相手と対等でありたいという気持ち。相手が何かをしてくれたら、何かお返しをしようとする。そして、帰属性というのは、ある集団に所属していたいという気持ちで、それはサルにもあるのですが、人間ではそれが集団を離れても継続する。

サルは自己の利益を最大化するために群れをつくっていると言ってもいい。その利益は何かと言ったら、食物と安全性です。仲間と一緒にいるほうがおいしい食物を安全に食べられるから、群れをつくっているわけです。群れの中で、個体同士は非互酬

的で、［A］関係を持って共存しています。劣位なサルでも群れを離れないのは、優位なサルに食物を独占されても、さほど不利益を蒙らなかったり、安全だったりするからです。母親と乳飲み子や幼児の間には、向社会的な関係が生じるかもしれません。でも、おとなになれば、たとえ血縁関係があっても一方的に奉仕するようなことはなくなります。また、サルはいったん群れを離れたら、もとの群れに対する帰属意識をまったく持たなくなってしまう。もとの群れに戻ることもめったにありません。これはゴリラやチンパンジーなどの類人猿でも同様です。

だから、人間は霊長類としてはとても変な社会をつくったわけです。向社会的な家族を食の共同を通して結びつけ、互酬性を基盤とした共同体を組織した。そして、この共同体に半永続的に帰属意識を持つような関係を保つようにした。共同体は出入りが可能です。出て行くことも、帰ってくることもできる。出て行っても、人間はよそ者にならず、帰属意識を永遠に持ち続けて、もとの共同体と新しく加入した共同体をつなぐ。結婚が二つの家族を結びつけ、二つの共同体を連繋させる結果になる。

人類の祖先はまずアフリカで進化し、ホモ・エレクトス段階でアジアやヨーロッパに進出し、最後にホモ・サピエンスになってから再びアフリカから世界中に広がったことが化石証拠からわかっています。いくつか重要な特徴が、その時々に現われていますが、その中で重要なのは人間の生活史の変化です。生活史というのは簡単に言えば、人間の一生を通じた成長と繁殖のスケジューリングです。

現代人の生活史の特徴を類人猿と比べてみると、人間の特異性がよくわかります。まず、人間の赤ちゃんというのは大きいんですね。三キログラムある。ゴリラは、おとなになると雌は一〇〇キログラム、雄は二〇〇キログラムを超えるほど体が大きくなるのに、生まれたときは一・八キログラム。すごく小さいです。そしてゴリラの赤ちゃんはおとなしいが、人間の赤ちゃんはよく泣く。でも、ゴリラの赤ちゃんは三年間はお乳を吸うのに、人間の赤ちゃんは一歳ぐらいで乳離れしてしまう。大きな体重で乳離れが早いということは、成長して生まれてくるのだと普通は思いますが、人間の成長はとても遅いのです。人間の赤ちゃんは他の霊長類に比べて、生まれるときの体重は重く、離乳するときの体重は軽いという特徴を持っている。なぜこんな不思議な特徴が進化したのでしょうか。

類人猿も人間も、乳児期、少年期、成年期、老年期という時期を一生の間に経験します。乳児期はお乳を吸っている時期、少年期は離乳しておとなと同じものを食べられる時期、成年期は繁殖する時期、老年期は繁殖から引退する時期です。しかし、それぞれの種によってその長さがちがいます。オランウータンの乳児期は七年もあり、ゴリラもチンパンジーもそれぞれ三年、四年と結構長い。人間だけが一、二年でお乳を吸うことをやめてしまう。ただし、すぐに少年期へ移行できません。六歳までは小さく華奢（きゃしゃ）な乳歯ですから、おとなと同じものが食べられない。だから、子ども期というものを持っています。この期間は特有の食べ物をやらなくちゃいけない。いまでこそ人工的な離乳食がたくさんありますが、農耕や牧畜以前はわざわざ子どもに食べられるものを探して運んでこなければならなかったはずです。なぜそんなコストをかけてまで早く離乳させたのでしょうか。

もう一つ、人間には、繁殖能力がついても繁殖できない、繁殖をしないという時期があります。これを青年期といいます。こういう特別な二つの時期が挟まっている。そして、老年期が長い。こういう類人猿にはない三つの特徴を持っています。

なぜ人間の赤ちゃんは乳歯のうちに離乳してしまうかというと、これはおそらく妊娠可能な時期を早めるためです。人間は進化の初期の時代、森林から離れて草原に進出したときに、肉食獣に襲われた。だから、幼児死亡率が格段に上がったはずです。そのために多産になって子どもの数を補充する必要に迫られた。だいたい狩猟される動物は多産ですね。一度にたくさんの子どもを産むか、何度も子どもを産むかです。人間は後者の道を選んだ。そのため、早くから赤ちゃんをおっぱいから引き離して、おっぱいを止めた。そうすると、プロラクチンというお乳の産生を促すホルモンが止まって、排卵が回復し、次の出産の準備ができる。そういうことが起こったのでしょう。

人類の進化の最初に登場した人間らしい特徴は直立二足歩行です。それから五〇〇万年間も経ってから、脳が大きくなり始めたんです。そのとき、人間はすでに直立二足歩行を完成させてしまっていたから、頭の大きな子どもを産めなかった。二足歩行がしやすいように骨盤がお皿状に変形して、産道を大きくすることができなかった。だから、頭の小さな子どもを産んで、産んでから急速に脳を発達させる必要が出てきたのです。

人間の赤ちゃんの体重が重いのは、この急速に発達する脳を守るためです。この時期に子どもの脳は、摂取エネルギーの四五

〜八〇%を消費します。栄養の供給が滞ってはいけないので、たくさんの脂肪をあらかじめ蓄えて人間の赤ちゃんは生まれてくるのです。人間の赤ちゃんが重いのは高い脂肪率のせいなんです。人間の子どもの成長が遅いのは脳の成長を優先させて、身体の成長を遅らせるためです。

そうすると、一二〜一六歳で脳の成長がストップした頃に、エネルギーを身体の成長に回すことができるようになって、身体の成長が加速する。これを思春期スパートといいます。男の子にも女の子にもある。この時期は心身の成長のバランスが崩れて不安定になります。これは脳の成長に身体も追いつく時期で、繁殖力を急速に身につける時期であるとともに、学習によって社会的能力を身につけなければならない期間でもあるのです。

類人猿とちがって、人間は［B］と［C］という変な時期を持つようになりました。この時期を誰かが支えてやらなくちゃいけない。おそらく、親以外のおとなたちがこぞって支えて共同保育をすることになった。それが、［D］と共同体という重層構造の社会をつくった背景だと思います。

初期の人類は、気候の変動によって森林が縮小して、草原に出ざるを得なくなった。そのことによって、直立二足歩行をはじめとしていくつかの形態的な、あるいは生理上の変化が要求された。そして、集団を大きくし、脳を増大させた結果として、集団で共同保育をしなければならなくなって家族が誕生した。ですから、家族というのは、脳が大きくなり始めた二〇〇万年前以降に登場したのだろうと思います。

当時、言葉をまだしゃべらなかった人間は、音楽の能力を高めたはずです。[5]音楽はおそらく育児というものを通して起こったのだろうと思います。人間のお母さんは赤ちゃんを離して、どこかへ置いたり、他人の手に預けるからです。だから、人間の赤ちゃんは大声で泣く。泣くのは自己主張です。ゴリラの赤ちゃんはずっとお母さんの腕の中にいるから泣く必要がありません。泣き叫ぶ赤ちゃんに、おとなたちは泣き止ませるために働きかける必要があります。赤ちゃんは言葉をしゃべれませんから、言葉が登場した現在でも言葉の意味がわかりません。語り掛けられる音楽的なトーンによって赤ちゃんは安心感を覚えるのです。お母さんに抱かれているような安心を与えるために、おそらく音楽というものが発達したのではないでしょうか。

そして、その音楽が食物の分配と同じように、おとなから子どもに与えられるものから、おとなの間に普及するようになった。その結果、赤ちゃんとお母さんの間に見られるような感情の一体化が促進されて共感力が高められた。

言語以前のコミュニケーションの進化の道筋として、まずは音楽的なコミュニケーションで同調が強化される。次に、危険なニッチ(生活場所)に人間が長く居続けることによって、相手と自分が同じ気持ちを抱くということが、非常に大きな生存価を持つようになった。それが心の理論(相手が考える心を持つということを認知する能力)や意図的な共同を生んで、ついには言語というものが成立するようになったのではないでしょうか。だから、人間の社会性に至る道というのは、おそらく [E] が大きな出発点となり推進力となっていると思います。

(山極寿一「こころの起源—共感から倫理へ」による)

＊ホモ・エレクトス…現生人類(ホモ・サピエンス)の祖先とされる化石人類。

問一　傍線部1「他の霊長類のように行ったきりではなく、出たり入ったりする」とあるが、この行動を特徴づける概念として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [13]。

① 互酬性　② 共感力　③ 向社会性　④ 構成員　⑤ 帰属意識

問二　傍線部2「チュウサイ」の漢字として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [14]。

① 仲采　② 仲裁　③ 仲債　④ 仲済　⑤ 仲採

問三　空欄 [A] に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は [15]。

① 敵対　② 血縁　③ 優劣　④ 縄張　⑤ 所属

問四　傍線部3「ゴリラの赤ちゃんはおとなしいが、人間の赤ちゃんはよく泣く」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 16 。

① ゴリラの赤ちゃんと異なり、人間の赤ちゃんは、自己防衛本能を生得的に備えているため。
② ゴリラの赤ちゃんと異なり、人間の赤ちゃんは、成長のスピードが遅く、乳児期が長いため。
③ ゴリラの赤ちゃんと異なり、人間の赤ちゃんは、泣く行動を通して言語を獲得していくため。
④ ゴリラの赤ちゃんと異なり、人間の赤ちゃんは、母親のもとから引き離されることがあるため。
⑤ ゴリラの赤ちゃんと異なり、人間の赤ちゃんは、養育者の庇護なしでは生命を維持できないため。

問五　傍線部4「乳離れが早い」とあるが、その理由として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 17 。

① 母親の妊娠可能な時期を早めるため。
② 外敵に襲われるリスクを減らすため。
③ 幼児期へのスムーズな移行を促すため。
④ 身体よりも脳の成長を優先させるため。
⑤ 母親の育児の負担を減らすため。

問六　空欄 B 、 C に入る語句の組み合わせとして最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 18 。

①B＝乳児期　C＝老年期
②B＝少年期　C＝成年期
③B＝子ども期　C＝青年期
④B＝子ども期　C＝少年期
⑤B＝成年期　C＝老年期

問七　空欄 D に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 19 。

① 個体　② 群れ　③ 集団　④ 家族　⑤ 仲間

問八　傍線部5「音楽はおそらく育児というものを通して起こったのだろうと思います」とあるが、その内容の説明として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 20 。

① 日々育児に追われる大人たちにとって、音楽的なコミュニケーションは、お互いの理解を深めるツールとなるだけでなく、癒しの効用もあったと考えられる。

② 人間の赤ちゃんは、母親のもとから引き離されることがあったが、育児を手伝う周りの大人たちによって語り掛けられる音楽的なトーンは、赤ちゃんに母親に抱かれているのと同様の安心感を与えたと考えられる。

③ 生まれる前から母親の胎内で大人の声を聞いている赤ちゃんにとって、大人によって語り掛けられる音楽的なトーンは安心感を覚えるものであったと考えられる。

④ 伝達手段としての言語がまだ形成されていなかった時代においては、音楽のみが意思疎通を図る唯一のコミュニケーションの形態であったと考えられる。

⑤ 音楽は、舞踊、絵画、彫刻などの他の芸術ジャンルと同様、人間の始原的な生活空間の中で生み出されたものであるが、それは特に育児を通して発達したと考えられる。

問九　空欄 E に入る語句として最適なものを、次の①～⑤から選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 21 。

① 繁殖力　② 気候変動　③ 互酬性　④ 共同育児　⑤ 規範意識

問十　本文の内容に合致しないものを次の①～⑤から一つ選び、記号をマークせよ。解答欄番号は 22 。

① 共同体と家族という異なる論理の組織が両立した社会は、人間以外の動物の社会においては見られないものである。

② サル、ゴリラ、チンパンジーは、一度群れを離れると、そのもとの群れに対する帰属意識を持たなくなる。

③ 人間の子どもが他の霊長類の子どもに比べて成長のスピードが遅いのは、身体の成長よりも脳の成長を優先させるためである。

④ 初期の人類は、気候変動によって森林が縮小したことで、草原へと進出することを余儀なくされた。

⑤ 語り掛けとしての音楽は、大人の間にも普及したが、そこでは赤ちゃんとお母さんの間に見られるような感情の一体感は生まれなかった。